

監督として大切なこと

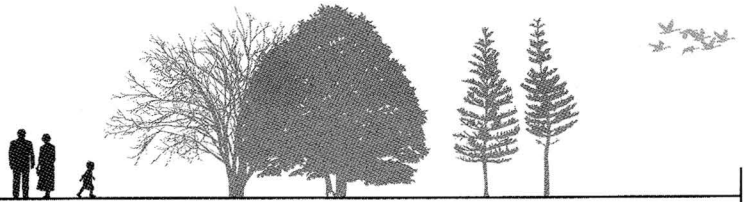


NPO法人ソフトボール・ドリーム
理事長

宇津木 妙子

うつぎ たえこ

1953年埼玉県生まれ。中学時代からソフトボールを始め、72年ユニチカ垂井に入社し、ソフトボール部で活躍。85年に現役引退し、日立高崎（現・ルネサスエレクトロニクス高崎）に日本リーグ初の女性監督として就任。当時3部だったチームを1部に昇格させ、3度の日本リーグ優勝に導く。97年には日本代表監督に就任し、シドニー五輪では銀メダル、アテネ五輪では銅メダルを獲得した。2010年より現職。主な著書に『宇津木魂』（文藝春秋、2008年）などがある。



2020年の東京五輪開催が昨年9月に決まりました。本当に楽しみです。

実はその少し前、私は還暦を迎えました。一つの節目ですが、あまり実感がわきません。日々、自分と向き合い、自分と戦うために、学生時代から始めた、腕立て・腹筋を1日、各500回という習慣は、47年間欠かさず今も続けています。周囲から「宇津木さんは若いね」と言われますが、そんなところに秘密があるのかもしれない。

好きで始めたソフトボールで、選手としても監督としても日本代表に携わることができた、幸せな人生だと思います。現在も実業団や大学の総監督として、選手だけでなく指導者の育成にも取り組んでいます。

チームはいわば、会社と同じ、組織です。組織の長として私が最も大切にしてきたことは、率先垂範の意識です。

どんなときでも、選手は監督を見えています。まずは選手とともに一緒に汗を流すことです。言葉だけでは、誰もついてこないでしょう。例えばノックは、指導者にも根気と体力が必要です。「やれ」で

はなく「一緒にやる」という意識が重要だと思っています。

これは相互に理解しあうということにもつながります。例えば、日本代表監督としてオリンピックを目指していたとき、私が最初に行ったのは選手の性格や特徴を把握するための面接でした。話すだけでなく、書かせる。そして、観察するのです。そうすると、誰に対して、どういう場面でどのような言葉をかけるのが有効か見えてきます。

もちろん、理解は「相互」が基本です。私がかっこうをつけていたら、選手もすべてを見せてはくれません。私のことを選手に知ってもらうこと、つまり自分をさらけ出す勇気も指導者には必要だと思うのです。監督にも失敗や間違いはあります。大切なのはそれを隠さないことです。完璧な人間などいません。これが結果的に親近感や安心感となり、個々の力を最大限に引き出すことに結実していくのだと思います。

明確な目標の提示というのも大事です。例えば、オリンピックの金メダルという目標をチームで共有する。そのためにどうすればい

いか、指導者も選手と一緒に考えて、実践する。とてもシンプルなことですが、多くの組織ではこれがなかなか実行できていないのではないのでしょうか。

また、このとき低い目標は掲げないことです。基本は一番を目指すべきでしょう。チームとして「日本一」や「世界一」を目指す。勝負をする前から「ベスト4を目指します」なんて監督が言った時点で負けだと思います。目標が高からこそ、努力の質も高まるからです。

「一番」を目指すエピソードとして、私の教え子の話を紹介したいと思います。彼女は良い素質を持っていながらレギュラーになれず、3年でチームを去りました。彼女は辞める際、私にこう言いました。

「3年間お世話になりました。私はレギュラーとして活躍はできませんでしたが、日本一のチームのバットひき（打った後のバットを片付ける係）として貢献することができました。この経験を生かし、今後の人生を頑張ります」

彼女は大阪で看護師となり、今も「その道の一番」を目指して頑張っています。